

自然を語る会（読書会）報告

2月16日 於、東京ボランティア市民活動センター

担当：岩淵徹郎 参加：9名

ポール・ブルックス著 神遠恵子訳『レイチェル・カーソン』

## 第21章（最終章）「旅路の終わり」

レイチェル・カーソンが、病と向き合いつつ、『沈黙の春』を完成（原稿完/1962年1月、「ニューヨーカー誌」連載開始-同年6月、単行本発行-9月）後、世を去る（1964.4.14）まで、たったの約2年。その日々について（年表で）たどった。この間の彼女の行動、偉大な成果、明るくめげない精神等を確認しつつ、皆で輪読や、補足や問、気づきなどを交換し楽しんだ。

最終章であったが、大事な部分「信念の表明」（p282～）等は、次回（3月16日）にて継続されます。次回のご担当（及び締め）は、鈴木善次氏並びに上遠恵子氏です。

ご期待ください。皆さまのご出席を心より歓迎します。

（ケネディ）大統領諮問委員会（カーソンの主張に沿った）報告書を得た後、複数の上院委員会の公聴会での証言や発言などの政治活動、論敵と対峙したテレビ出演、各地での講演、危険な化学物質使用に関する不断の情報収集と対処、亡くなる直前まで数多の受賞、そして美術文芸アカデミー会員へ迎えられた最高の栄誉等々である。明るく充実した日々を最後まで送ることができた後ろ盾は、暖かい友情、創意、能力溢れる親友たち、ドロシー・フリーマン、ロイス・クライスラー、アン・コットレル・フリーなどとの交流であった。

「生命への畏敬」という哲学、ナチュラリスト精神でカーソンは生涯を貫き通した。数多の受賞のうち最も心を動かされたのはシュヴァイツァー・メダルであり、カーソンは著作『沈黙の春』冒頭にアルベルト・シュヴァイツァーへ捧げると記した。

数々の伝統あるナチュラリストグループや自然保護団体等からもメダルを授与された。全米野生生物連盟、イサーク・ウォルトン連盟、全米オーデュボン協会その他である。

カーソンは亡くなる半年前カイザー・メディカル・センター（サンフランシスコ）で講演した翌日、かねて念願だったミュアの森をシェラクラブのリーダー夫妻と一緒に訪れた。ヨセミテ渓谷を抱くシェラネバタ山脈からとった Sierra Club は「ナチュラリストの草分け」、「自然保護の父」と呼ばれるジョン・ミュアが創立した。 John Muir(1838～1914) National Audubon Society の創立者もジョン・ミュアである。

自然、生き物と生命、を愛し貫いた科学者、文学者、詩人カーソンへの熱い想いつまでも  
(文責：岩淵徹郎)